

現代語における文末表現の分析

—「ケド」で終わる文を中心に—

成田 麻衣子

要旨

本稿では、「ケド」に含まれる話し手の気持ち・「ケド」で終わることによる機能・「ケド」が表れた後の聞き手の反応について明らかにしたいという目的で分析を行った。

本稿は、日本語母語話者の「ケド」で終わる文の談話分析の結果を踏まえて、話し手の「ケド」で終わる発話が談話の中でどのような働きをしているのか、話し手のどのような思いからこのような「ケド」で終わる発話がなされるのか、また、「ケド」で談話を終わらせることが聞き手にどのような影響を与えるのかについて考察したものである。自然な発話に近い談話をデータとして使うため、生放送のトーク番組・ドラマでの談話をデータとして使用した。その結果、130ヶ所に「ケド」で終わる文が観察された。「ケド」で終わることによる機能・「ケド」に含まれる話し手の気持ちとしてそれぞれ6種類に、「ケド」が表れた後の聞き手の反応として7種類に分類されることが分かった。

今後、本稿での分析結果を少しでも日本語教育の現場で役立てることができるよう、さらに研究を進めていきたい。

【キーワード】「ケド」で終わる文、話者の交代、補正、遠慮

1. はじめに

書きことばにおいては、言語主体が伝えたい内容を思い付くままに文字化し、それをそのまま伝えるということはまずないであろう。伝えたい内容をより正確に分かり易く伝えるために、推敲が行われるはずである。修飾語を付け加えたり、補語の順序を入れ替えたり、重複表現を削除したりすることによって、一つの表現がつくられる。

これに対して、話しことばは時間の流れのなかで一瞬にして消えてしまう音声によって表現されるために、書きことばのような空間的な推敲は不可能である。話し手は、時間的制約のなかで音声によって発話した要素を記憶しつつ、文法規則に照らし合わせながら次の要素を付け加えていくという形で表現されていく。話しことばは、「一方において饒舌で長たらく無駄が多いと同時に、他方において舌足らずで、短すぎて説明不足であるという両面を持っている」ために文の認定が書きことば以上に難しい。

日本語の話しことばの中には、最後まで言い切らず、文の途中で終わっているものが見られる。そのような文の中に、次の例のように接続助詞「ケド」(注1)で言い終わっている文がある。

G: たばこ吸われないって聞いたんですけど

T: あっ、ええ

(笑っていいとも!)

これは、話し手が文を「ケド」で終わらせることにより何らかの効果があると理解しているからであると思う。また、文の終わりにくる「ケド」は、聞き手に対しても何らかの影響を与えていると思える。

日本語の会話において、特に文末表現には、話し手と聞き手との関係、聞き手との情報の共有関係、聞き手へどう働きかけるかなど、聞き手に対する態度が示唆されている。このような文末表現は、命題のみの表現に比べ、日本語学習者にとって習得が難しいと報告されている。本研究では、日本語学習者がより円滑なコミュニケーションを行うための一助となるよう、談話表現を中心に「ケド」で終わる文について考察していきたい。

2. 先行研究

2-1 日本語学習者の文末表現の習得

日本語の会話において、特に文末表現には、話し手と聞き手との関係、聞き手との情報の共有関係、聞き手へどう働きかけるか、聞き手への態度などが含まれてくる(峯 1995, p. 65)。このような文末表現は、命題のみの表現に比べ、日本語学習者にとって習得が難しいということが報告されて

いる。ここでは、日本語学習者がどのように文末表現を習得しているのかについて、佐藤(1994)、峯(1995)の調査結果をもとにまとめていきたいと思う。

文末表現の使用、また誤用にあたっては、母語による特徴的な表現というものは見られない。更に、文末表現の習得にはある種の普遍的と思われる習得の段階があると思われる。「よね」「のね」「のよ」の使用には、それに先行して必ず「ね」「の」「よ」の使用が見られるというような、普遍的な習得順序があるようである。その他の表現に関しては言語レベルによる習得の段階によって説明される。例をあげると、「かな」「な」に関しては「ね」「よ」には遅れるが比較的初期の段階から使用され、「の」「もん」「わけ」「よね」は中級以上からというような、学習者の言語能力レベルに応じた普遍的と思われる習得の段階が観察された。また、接続助詞等で文末を省略するような表現は初期の段階から出現し、言語レベルと共に次第に表現形式が増えている。文末表現の習得には、言語レベルに適した言語形式のインプットを得られる学習環境であるかということが大きく関わっていると言える。

従来、日本語初級の教科書においては、言いさし表現がまとまった形で正面から取り上げられることはほとんどなかった。中級段階でも、10年ほど前までは、文型中心の教科書はもとより、会話中心の教科書においても言いさし表現の出現回数や種類はごくわずかであった。近年のコミュニケーションを重視するタイプの教材では自然な発話の形として言いさし表現が用いられるようになり、教科書・参考書類の解説の中でも言いさし表現が独立した学習項目として取り上げられる例が増えつつあるが、日常会話での使用頻度やその機能面からみた重要性に照らして、言いさし表現の指導はまだ不十分であると言わざるをえない。ここで、初級・中上級学習者の「ケド」で終わる文末表現の習得について例を挙げながら見ていきたいと思う。

《初級段階》

- ① 父：これを見せていただきなさい。
喜美子：えーっ、お見合い？
おじ：うん、実は私の甥ただけどね。
喜美子：あ、そう。だって、まだ私…。
おじ：いやあ、いい男だよ。フリーでカメラマンやってるただけどね。
喜美子：そうですか。でも、私、自分で捜しますから。

この場面での言いさし行為は、相手の気のすまないことを勧める場合の高度かつ微妙なストラテジーとして採用されているもので、会話作りの練習で初級の学習者にこの言い方を期待することは無理な面があるが、注目すべきことは「ケド」の聞き取りの成績がよくないことである。これは学習者が「…が/けど」で終わる言い方について明確な文法的知識を持っていないというばかりでなく、日常会話においてその種の言い方が存在すること自体に気づいていない場合が多いということを示すものであろう。このように、母語話者であればごく自然な発話の形態として容易に選びとられる言いさし表現が、日本語学習者においてはなかなか使えないばかりか、場合によってはその存在すら知られていないというのは問題である。

《中上級段階》

- ② NNS：日本語—自体は、このごろあんまり中心にしていませんけれど。
NS：うーん。
NNS：そのかわり大分乱れてきましたけれど。
③ NS：Rさんは日本語がとても上手だそうですね。
NNS：いやいや、とんでもないですけど。
NS：自信はありますか？
NNS：え？日本語を話す自信ですか？
NS：ええ。
NNS：すー、そうですね。えー、自信、自信はそんなにないんですけれど。
(注)NNS：non-native speaker (日本語学習者)、
NS：native speaker (日本語母語話者) のことである)

ここで、「けど/けれど」を用いながらやわらげの効果が十分に出ていない理由として、発話の

不自然さや、「いやいや」「えー」などの固い表現が多いことがあげられるが、この会話文を見る限り、問題はそれだけではなく、「けど／けれど」の不適切な使い方にも存するように思われる。「…けど」の形を使えばやわらげになる、あるいは丁寧になるといった固定観念の存在がうかがわれる。問題は、こうした理解によって「が／けど」を発話の終わりに付けることが、待遇上、常に好ましい結果をもたらすとは限らないということである。例えば、「行きますか？」という質問に対する「行きますけど」という返答は、たしかに断定を避けたやわらかい言い方であり、相手のコメントを受け入れる余地を残しているが、それだからといってストレートに「行きます（よ）」と言うより丁寧に聞こえるとは限らない。むしろ、この言い方は本来、「行きますけど（問題があるので何とかしてほしい）」といった要望の表現、あるいは「行きますけど（本当に行ってもいいのか）」といった疑問の表現として、否定的なニュアンスをともなって使われる場合が多いのではないだろうか。さらに、この「行きますけど」を、尻上がりイントネーションで発音したらどうだろうか。「行きますけど（何か文句ある？）」と、問いただすような調子になるであろう。

要するに、「が／けど」で終わる発話が、「が／けど」の前で言い切った場合に比べて丁寧でない、場合によってはかなりきつい調子を帯びた発言になることが珍しくない。相手に情報要求をすることが礼儀にかなっていない場合、例えば、何かをしようとして相手の意向をたずねるといった場合には、「…が／けど」という言いさし表現は、相手への配慮を示すものとして丁寧に聞こえるが、情報要求の内容が相手の感情を害するようなものである場合は、最後まで言わないことでやわらげを図っているにせよ、この形を用いること自体がすでに礼を失していることになる。十分にゆきとどいた解説なしに、「…が／けど」という形の言いさし表現を丁寧表現として提示することの危険性がここにある。

以上みてきたように、言いさし表現については、初級では一般にその習得の低さ、また中上級の一部ではその過剰使用が問題になっていると言える。まず、初級では、初級の早い段階から会話練習の中に言いさし表現を取り入れていくことが必要であろう。続いて、初級の後半から中級にかけての授業の中では、機会あるごとに言いさし表現を使って話す訓練を行う必要がある。ただし、この段階からは、それを使う理由がはっきりわかった上で言いさし表現が用いられることが望ましい。これらの点に十分に配慮し、豊富な練習問題とゆきとどいた解説を兼ね備えた教科書を作成することが必要である。

3. 「ケド」で終わる文の分析結果と考察

3-1 調査の目的

「ケド」は本来、接続助詞として二つの節を結び、逆接用法、対比用法、前置き用法、提題用法、挿入用法、終助詞用法といった用法があることが指摘されているが、談話では「ケド」で終わっている表現がしばしば観察される。これは、話し手が、文を「ケド」で終わらせることにより何らかの効果があると理解しているからであると思う。また、文の終わりにくる「ケド」は聞き手に対しても何らかの影響を与えていると思う。

本研究では、トーク番組やドラマで観察された「ケド」で終わる談話を分析し、話し手のこのような発話が談話の中でどのようなはたらきをしているのか、話し手のどのような思いからこのような「ケド」で終わる発話がなされるのか、また、「ケド」で談話を終わらせることが聞き手にどのような影響を与えるのかについて、明らかにしていきたい。

3-2 調査の概要

生放送のトーク番組（注2）における司会者とその日のゲストとの会話、また、ドラマ（注2）での会話を録画した。録画した期間は、2002年2月から8月までの、6ヶ月間である。収集した談話は41種類、「ケド」で終わる文が表れた談話は130ヶ所である。

F1～F13は生放送のトーク番組である。“笑っていいとも！”は、対話に近い形をとっており、“徹子の部屋”と“レディス4”は、話題がほぼ決まっており、対話とインタビュー形式の折衷型といってもよい形態をとっている。

F14～F41はドラマである。製作者はより自然な会話にしようと心掛けているのではないかと考えられるため、データとして収集した。

3-3 分析の観点

録画した生放送のトーク番組・ドラマを文字化し、以下に示す3つの観点から分析した。

- (1) 「ケド」で終わることによる機能

- (2) 「ケド」に含まれる話し手の気持ち
 - (3) 「ケド」が表れた後の聞き手の反応
- その際、

T: ずいぶん前にテレビで拝見したんですけど、その時ですら手術したのはちよ
っと前だって、普通にしてテレビに出ているんでしょう？

G: はい、そうですね。

(徹子の部屋)

のように、文の最後ではなく、文の途中で観察される「ケド」は考察の対象とはしなかった。

3-4 「ケド」で終わることによる機能

録画した談話において観察された「ケド」で終わっている発話について、【表1】に示すように①～⑥の機能が明らかになった。ここでは、「ケド」で終わることによる機能について分析していきたいと思う。

「ケド」で終わることによる機能	発話数
① 自分の意見・情報、または相手と違う意見を柔らかく表現する機能	4 8
② その後の判断を相手に任せ、話者の交代を促す機能	2 4
③ 先行の文で話し手自身が言ったことを補正する機能	2 3
④ 話し手の謙虚さを示す機能	1 9
⑤ 不確かな情報を表現・確認する機能	1 2
⑥ 許可を求める機能	4

【表1】

①の「自分の意見・情報、または相手と違う意見を柔らかく表現する機能」では、自分の意見・情報を述べる場合は、押し付ける感じを聞き手に与えないために、また、恥かしさや不安な様子を聞き手に伝えるためなどに「ケド」を用いていることが分かった。一方、相手と違う意見を述べる場合は、聞き手の気持ちに配慮するために「ケド」が用いられることが分かった。

②の「その後の判断を相手に任せ、話者の交代を促す機能」では、「ケド」で終わらせることにより、話し手の気持ちを一方的に伝えるのではなく、聞き手に発話権を渡し、聞き手の自由な判断でその後の発話を続けられるようにしているのだと思う。このような「ケド」の使い方は、岡田(1991)も述べているように、話し手は聞き手が察してくれることを期待して、直接的な言い方をせず、聞き手の自由な判断で対応できるように曖昧でぼかした言い方をし、日本人独特の心理によるものだと思う。

③の「先行の文で話し手自身が言ったことを補正する機能」は、先行する文から聞き手が導き出すかもしれない含意をキャンセルするために、但し書式的に付加されるものである。この機能の「ケド」は、話し手の発話から聞き手が間違った判断をしてしまった、話し手が伝えなかったこととは異なる印象を与えてしまったと、話し手が理解した時に、その間違った判断や印象を正しいものにするために使われることが分かった。

④「話し手の謙虚さを示す機能」は、話し手自身や話し手の身内の事について話し手が言及する場合に多く用いられていた。これらのことから、話し手のありがたいと思っている態度を伝えたい、また、自慢している印象を減らしたいという態度から「ケド」が付けられていることが分かった。

⑤の「不確かな情報を表現・確認する機能」は、内田(2001)も述べているように、不確かな情報を提示して、事の真相を知っている人に「本当はどうなのか」を尋ねているものである。これらの場合は、自分が得た情報と事実とが対比されていることが多い。この機能では、「ケド」を付けることにより、直接的すぎる質問を柔らかく、遠回しにしたり、はっきりと言葉では表現しにくい話し手の内容を聞き手に効果的に伝えているのではないだろうか。

⑥の「許可を求める機能」では、聞き手に対し、話し手の意見や願望などを提示し、「どうですか」「いかがですか」「どうでしょうか」などのニュアンスを相手に伝えるために「ケド」が用いられていることが分かった。この機能では、「ケド」で終わらせることにより、聞き手に対して柔らかく(あるいは婉曲的に)持ちかけるような表現効果が生じているといえる。

3-5 「ケド」に含まれる話し手の気持ち

録画した談話において観察された「ケド」で終わっている発話について、【表2】に示すように①～⑥の気持ちが明らかになった。ここでは、「ケド」に含まれる話し手の気持ちについて分析し

ていきたいと思う。

「ケド」に含まれる話し手の気持ち	発話数
① 聞き手に対する話し手の遠慮	41
② 話し手の発言により聞き手が誤った判断をしないようにという気持ち	26
③ 言葉には表れていない話し手の隠れた気持ち	23
④ 自分の発言に対して自信のない気持ち	17
⑤ 質問に対する答えとしてこれでよいのかという気持ち	13
⑥ 相手に同意してもらいたいという気持ち	10

【表2】

①の「聞き手に対する話し手の遠慮」では、「ケド」で終わることにより、聞き手にとっては「ケド」が付かない言い切りの形と比較すると、話し手が遠慮がちに話している感じがし、また、柔らかい印象を持つのに役立っている。話し手自身も「ケド」で終わる表現をすることにより、遠慮がちに話しているという気持ちを伝えるのに役立っていると思う。

②の「話し手の発言により聞き手が誤った判断をしないようにという気持ち」は、話し手自身が言ったことを補正するものである。話し手が発話した後で誤解の可能性に気づいた場合に「ケド」が使われる。聞き手の受け取った内容が話し手の本意とは違っていることに気づいた話し手が、「ケド」を使って話の内容を正しい方へ導いているということが分かった。

③の「言葉には表れていない話し手の隠れた気持ち」は、「ケド」で終わらせることにより、発言した部分と発言から推測できる部分の両方を聞き手に伝えようとしたものである。「ケド」で終わらせることは、話し手にとっては「ケド」の付いた文で言いたかったことと同時に、その文に隠された話し手の本当の気持ちを聞き手に効果的に伝えるのに役立っていると思う。また、聞き手にとっては、文の最後に「ケド」が付くことにより、「ケド」の後に隠されている話し手の気持ちを推測するのに役立っているのではないだろうか。

④の「自分の発言に対して自信のない気持ち」は、話し手が記憶の定かでない昔のことを述べる場合や、はっきりとした根拠のない話をする場合に「ケド」が用いられていることが分かった。文の最後に「ケド」を付けることにより、話し手の自信のない様子を聞き手に伝えるのに役立っているといえる。

⑤の「質問に対する答えとしてこれでよいのかという気持ち」は、いずれも相手の質問に対する答えの発話の中に観察されたものである。答えを「ケド」で終わらせることにより、相手の質問に対する答えとして今自分の言ったことが適当であったか・相手はこのような答えを期待していたのだろうかという、話し手の気持ちを表現するのに役立っているということが分かった。

⑥の「相手に同意してもらいたいという気持ち」は、依頼や要望・話し手の発話が聞き手に対して何らかの負担をかけてしまう場合や、話し手の意見を受け入れてもらいたいと思う場合に「ケド」が用いられていることが分かった。これは、自分の質問や意見を表現すると同時に、相手の意見や考えを聞くニュアンスを伝えることになり、より柔らかな表現効果が出ているといえる。

3-6 「ケド」が表れた後の聞き手の反応

録画した談話において観察された「ケド」で終わっている発話について、【表3】に示すように①～⑦の反応が明らかになった(注3)。ここでは、文の終わりに付けられた「ケド」が聞き手にどのような影響を与えるのかについて分析していきたい。

「ケド」が表れた後の聞き手の反応	発話数
① 相手の意見や説明を理解したことを示す	52
② 相手の発言に同意する(相手の発言を肯定する)	26
③ 相手の発言を理解し、気遣いをみせる	21
④ 相手の意見に同意(賛成)できないという態度を示す	13
⑤ 相手の発言を理解した上で、次の話題にうつる	11
⑥ 相手の発言に同意した上で、つぎの話題にうつる	2
⑦ 相手の発言を理解していないことを示す	2

【表3】

①の「相手の意見や説明を理解したことを示す反応」では、聞き手は話し手の発言に聞き手自身の知識や意見を付け加えたり、質問をしたり、また、話の内容を繰り返したりして、話し手の発言した内容を理解しているということを示していた。

②の「相手の発言に同意する（相手の発言を肯定する）反応」では、聞き手は話し手の発話内容についての賛成意見を述べたり、「そうですね」などのあいづちを打ったり、「ええ」「なるほど」など話し手の意見を尊重する反応をしていた。

③の「相手の発言を理解し、気遣いをみせる反応」では、聞き手は効果的な情報提供やアドバイスをして話し手の気持ちに配慮する発言をしていた。

④の「相手の意見に同意（賛成）できないという態度を示す反応」では、聞き手は話し手に質問をすることによって話し手の発言に同意していないということを示したり、言葉を濁しながら話し手とは違う意見を述べていた。

⑤の「相手の言葉を理解した上で、次の話題にうつる反応」では、聞き手は次の質問や話題を提供して次の話題にうつっていた。この反応は、いずれも聞き手が次の話題に変えることによって話し手の負担を和らげたり、不安を取り除こうとしているものである。

⑥の「相手の発言に同意した上で、次の話題にうつる反応」では、聞き手は次の質問をして話題を変えていた。聞き手は話し手の発話の最後に「ケド」が付いたことにより、話し手の遠慮や隠れた気持ちを理解し、質問をすることによって話し手の意見に同意しているということを伝えようとしたのではないかと思う。

⑦の「相手の発言を理解していないことを示す反応」では、聞き手は「どっちなの？」「え？」というような発言をして話し手に理解していない様子を伝えていた。聞き手は理解していないことを表現してはいるが、自分のために補足的な発言をしてくれた話し手のことを気遣ってか、聞き手はその場の雰囲気が悪くならないように、ふざけた感じが残るような言い方をしてその場の雰囲気を柔らかくしていた。

これらの反応の前に観察された「ケド」に含まれる話し手の気持ちは1種類ではないが、聞き手が話し手の気持ちに配慮した反応をしているということから考えると、話の最後が「ケド」で終わっていることにより聞き手は「ケド」に含まれる話し手の気持ちを察し易くなっているのではないかと思う。

4. おわりに

「ケド」の機能と「ケド」に含まれる気持ちには大きな関係があり、また、「ケド」が表れた後の聞き手の反応と「ケド」に含まれる話し手の気持ちにも大きな関係があることが言える。しかし同時に、1つの機能に対応する気持ちは必ずしも1つしかないわけではないことも分かった。もっといえば、1つの機能に含まれる気持ちは発話によって様々であり、また、1つの気持ちから使われる「ケド」の機能も実に様々な種類があることが分かった。一方、聞き手の反応も、1つの聞き手の反応に対する「ケド」に含まれる話し手の気持ちは必ずしも1つではなかったが、「ケド」が発話の最後に付けられていることにより聞き手が話し手の気持ちを気遣いながら発話したり、理解や同意したことを分かり易く伝えたりしていて、聞き手が話し手の発話や話し手の気持ちを理解するのに効果的に役立っていることが分かった。聞き手の反応からも分かるように、話の最後にくる「ケド」は、「ケド」に気持ちを託している話し手だけではなく聞き手の理解の過程でも大きな役割を果たしているのではないかと思う。

「ケド」で終わっている表現は、日本語母語話者の発話には、頻繁に観察される表現である。そのため、日本語学習者にも教えなければならない表現方法の一つであると思う。日本語母語話者の間でも「ケド」が本来の接続助詞として二つの節を結ぶだけでなく、本稿のように談話（文）の最後にも用いられるようになってきている現代では、このような「ケド」を日本語教育の現場で取り上げることは有益なことであると思う。日本語学習者がより日本語を理解し使い易くなるように、また、日本語母語話者とのコミュニケーションがより誤解のない充実したものとなるよう、「ケド」の機能・「ケド」に含まれる話し手の気持ちの両方から分かり易く教えていく必要があるのではないかと思う。

注

1. 実際の話し言葉では「～けど」あるいは「～が」で終わっている文が多い。しかし「けど」は「けれども」のバリエーションの1つなので、「けど／けれども」を調査の対象とした。また、

「～が」で言い終わる文も「けど」で終わる文と比べ、待遇的な違いがあるように思われるが、意味的には違いはないので、「けど」に含めた。

2. 本研究で録画したトーク番組とは、テレビ朝日の“徹子の部屋”・フジテレビの“笑っていいとも!”・テレビ東京の“レディス4”である。また、ドラマとは、TBSの“ピュア・ラブ”・NHKの“さくら”である。
3. 「ケド」が表れた後の聞き手の反応がないものが3例あった。これは、いずれもドラマに観察されたもので、「ケド」の付いた発話で場面が変わったためである。

参考文献

- (1) 石黒圭「逆接の基本的性格と表現価値」『国語学』 1999年
- (2) 内田安伊子「「けど」で終わる文についての一考察 —談話機能の視点から—」『日本語教育109号』日本語教育学会 2001年
- (3) 岡田安代「日本人はなぜ文末まで言わないのか?—会話を成り立たせる「共和」の原理」『月刊日本語1月号』 1991年
- (4) 才田いずみ・小松紀子・小出慶一「表現としての注釈 —その機能と位置づけ—」『日本語教育52号』日本語教育学会 1984年
- (5) 佐藤勢紀子「中上級日本語教育における中断文「・・が/けど」の扱い方」『東北大学留学生センター紀要』第2号 1994年
- (6) 白川博之「「ケド」で言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要6号』 1995年
- (7) 高橋太郎「省略によってできた述語形式」『日本語学12巻10号』 1993年
- (8) 永田良太・大浜るい子「接続助詞ケドの用法間の関係について —発話場面に着目して—」『日本語教育110号』日本語教育学会 2001年
- (9) 中山治「「ぼかし」の構造—日本語の表現心理」『月刊「言語」14巻12月号』大修館書店 1985年
- (10) 丸山直子「話しことばにおける文」『日本語学15巻9号』 1996年
- (11) 峯布由紀「日本語学習者の会話における文末表現の習得過程に関する研究」『日本語教育86号』日本語教育学会 1995年
- (12) 三原嘉子「接続助詞ケレドモの終助詞的用法に関する一考察」『横浜国立大学留学生センター紀要』第2号 1995年
- (13) 宮地裕「倒置考」『日本語学3巻8号』 1984年